

d.

発見

普段何気なく暮らし、見過ごしている「まち」が、ちょっと視点を変えただけで、ずいぶん変わって見えてくることがあります。ここでは、そうした「まち」への新たな気づきを生み出してくれる、「発見」型のワークショップをご紹介します。

まちづくりの現場で最もよく使われる「発見」型の手法は「まち歩き」です。テーマを決め地図やカメラを持ち、何人かのグループでまちを歩きます。普段とは違う見方、感じ方で新しい意味を見つけ、読み解いていく。あるいは再確認、再発見する。その成果はポラロイド写真や地図を素材に、まとめ、発表されることが多く、この過程でも参加者間で新たな発見が生まれます。神戸では「まちづくり」の第一歩として、自分たちのまちの課題と魅力を再発見する「まち歩き」がしばしば実践され、また防災・安全の観点からのマップづくりを目的とした事例も多いです。こうした「まち歩き」は、実際に体を運び、五感を使って体験することから、現場の実例を確認したり、イメージを共有するにも極めて有効な方法と言えます。またイベント性も高く、参加者の交流が生まれやすいという側面もあります。

また、よく見知ったまちの新旧の地図をグループで比較する、という方法もあります。例えば通い慣れた道がいつできたのか、あのお店が以前は全く別の用途を持った建物だったらしい、など各参加者の視点に基づく発見を通じて、まちに深々と横たわる歴史の厚みに触れることができるでしょう。他にも、特定のまちに関する古い写真を前に、それにまつわる記憶を参加者に自由に発言してもらい、ファシリテーショングラフィックの手法で整理して、その時期の生活像を描き出す、という方法などがあります。

プログラムは様々ですが、いずれの場合も、まず参加者の発見を促し、それを共有するプロセスを経て、「まち」への新しい眼差しが生み出されます。重層性を持つ「まち」を見る、多様な眼差しを得ること。それが「発見」型ワークショップの、大きな目的だと言えます。

五位の池小学校 まち発見！校区ウォーキング



□経緯

神戸市長田区にある市立五位の池小学校では総合的な学習の一環として、各学年ごとにテーマが決められており、今回まち歩きを行なった4年生では「地域の今を見つめよう バリアフリー*1からユニバーサルデザイン*2へ」となっています。その中で「人にやさしいもの・人・町」ということで自分たちの住むまちを点検するため今回のまち歩き（校区ウォーキング）を行いました。

□目的

①自分たちのまちは障害者・高齢者などの人々にとってやさしいまちなのだろうかということを点検することにより、バリアフリーさらにはユニバーサルデザインのまちづくりについて考える。

②まちづくりに対する関心を早い時期から持たせる機会とする。

□事前の学習

このまち歩きでは事前にテーマに沿った学習を行っています。

・事前の学習では、バリアフリー、ユニバーサルデザインについて専門家の人に来てもらい、話を聞きました。

・福祉体験学習（高齢者疑似体験・車椅子体験・アイマスク体験）も行いました。

事前の学習によりまち歩き当日の意義、目的がより深められ、効果も大きくなります。

□下見

まち歩きでは事前の下見も重要です。危険な箇所はないか、当日歩こうとしているところは事前の許可・約束が必要か、多少の雨なら問題ないかなどです。

□準備

（保険）今回のまち歩きは学校行事の一環であるため、あらためてかける必要はなかった

*1バリアフリー：障害のある人が社会生活していく上で障壁（バリア）となるものを除去すること。

*2ユニバーサルデザイン：全ての人が利用しやすい環境や製品のデザイン



のですが、通常はいざというときのため傷害保険をかけておくのが望ましいでしょう。
(関係機関などへの届出) 歩く場所によっては事前に所有者などに了承を得ておく必要があります。また人数がかなり多くなる場合は、事前に警察に届けておいたほうが良い場合もあります。

(名簿・名札) 途中でトラブルにあうことも考えられますので、参加者名簿は必ず作成しておく必要があります。

(ルート設定) 今回はグループ毎にエリアを設定し、エリアの中は時間の許す限り自由に歩きました。通常まち歩きをする場合はどういう形で歩くかを事前によく決めておく必要があります。歩き方にはいくつかあり、ルートの観点からは、ツアー型(ルートを事前に設定して歩く)、ゾーン型(歩くゾーンを事前に設定してその中で自由に歩く)などがあり、また人数からの観点からは、単独型、グループ型などがあります。スタートとゴールについても同じところにしたたり、違うところにしたたりと様々です。歩き方については歩く目的・時間・人数・何をみてもらうか等をよく検討した上で決めていきます。

(雨天対策) 当日雨が降ることも予想されるため、雨天対策をしておくことが必要です。どの程度の雨であれば中止するのか、またそのときは延期するのか、それとも別のプログラムを準備するのかを決めておく必要があります。雨の日のプログラムとしては事前に歩く場所の写真をとっておき参加者でみながら意見を述べるなどがあります。⇒コラムP.36参照

□持ち物

(カメラ) 現地での状況を撮影することにより、他の参加者との情報が共有でき有効です。また参加者が子供であれば、写真撮影そのものが楽しくて良い経験となります。今回はポラロイドカメラを用いましたが、最近ではデジタルカメラを使用する場合があります。それぞれの特徴は以下の通りです。①ポラロイドカメラ(すぐに写真が現像できるためあとのために利用することもでき有効ですが、コストが高いのが難点です)②デジタルカメラ(パソコン・プロジェクターなどの準備が可能であれば使用可能であり、あとで報告書をつくるときにも有効です)

(地図) 歩くエリアが入っている地図

(画板) 歩いているときに地図や紙に記入したりするため必要

SCHEDULE

08:30 スタッフ
集合・打合せ

30
min.

09:00 あいさつ・
オリエンテー
ション

20
min.

09:20 まち歩き
出発！！

85
min.

五位の池小学校 まち発見！ 校区ウォーキング

DATA

日時：2003.11.13 (木)
場所：五位の池小学校
参加者：小学校4年生56名 教師2名、保護者9名、
コンサルタント（ファシリテーター）1名、
ワークショップ隊6名、こうべまちづくりセンター6名

□オリエンテーション

今日のまち歩きで何を見てくるか、また何に注意して歩けばいいのか、また戻ってくる時間を参加者によく理解してもらう必要があります。今回のまち歩きでは、1班10名程度で1グループの中で①班長、②地図時計係、③写真記録係、④小さい子の立場、⑤妊婦さんの立場、⑥車椅子の立場、⑦視覚に障害がある人の立場、⑧聴覚に障害のある人の立場、⑨高齢者の立場、⑩自分たちにとって、の役割分担を行ないました。それぞれに役割を与えることによって、漫然と歩くことのないようにしました。

また学校から遠いグループには帰りの時間もよく考えて、歩くように注意しました。

□まち歩き

まち歩きでは、一緒に歩くスタッフは児童の支援者であるという立場で、各地区のポイントや発見に対して児童の気づきを第一にしながら、必要最低限の事柄は指導するという姿勢で臨みました。また児童がそれぞれの役割を果たすよう、路上駐車されている道では「車椅子の人は通ることが出来るかな？」といったような問いかけを行ないました。また、まちのよいところも見るようにしました。

まち歩きでの基本的なことです。児童には道路に飛び出したり、グループからはぐれたりしないよう安全面では十分注意しました。ポラロイドカメラをもって気になる場所や気に入った場所を撮影するようにしましたが、全員が一度は撮影できるように交代で行いました。ポラロイドカメラで撮影するのは初め



まち歩きの様子

10:45 学校に戻る。

休憩

15
min.

11:00 マップづくり

45
min.11:45 グループ毎
に発表45
min.

ての児童がほとんどだったので、非常に楽しんでいました。グループのメンバー全員で記念撮影した班もありました。

歩いている途中に雨が降ってきましたが、途中の店で傘を貸してもらったりして、まちの人たちの親切にふれることができ、児童たちには良い思い出になりました。

□まとめ・発表

会場に戻ってきてからは適宜休憩を取りながら、まとめ作業（マップづくり）に入りました。ポラロイドカメラでとった写真を地図にはり、現地の状況をふせんに記入して、絵などを描きながら楽しくまとめ作業を行いました。作業が終わったり、ひまそうにしている子には他の班のまとめ状況を偵察に行ってもらったりして、必ず何か仕事をさせるようにしました。

発表はグループ毎に行い、1人の児童が全部発表する班もあれば、班全員が1人一言ずつ発表する班もありました。まとめのときは大きな声で騒いでいた児童も、発表になりみんなの前でしゃべるときは緊張してほとんどしゃべることができなかつたりする場面もありました。

まち歩きをすることによりいろいろなことを発見しました。



グループ発表のようす

「道がガタガタになっていたり、みぞにふたがついてなかったりしました。」

「ふだんあまり気にしていない事が障害のある人達にとっては、とても大変な事がわかりました。」

「階段にてすりがあつたり、スロープがついてたりして五位の池のバリアフリーもありました。」

「地図のみかたが少しわかった。」

発見

12:30 終了

■まち歩きその後

まち歩きをした児童たちは、前年度に行った5年生、翌年度行う予定の3年生の前で学習発表会を行いました。まち歩きによって発見した事を発表することによって、自分達のまちについての意識が少しでも共有できたのではないかと思います。

□ 雨の日対応

ワークショップのプログラムには、まち歩きや現地調査、参考事例の見学等、屋外で行われるものもあり、雨の日の事も考えておかなければいけません。

まず考えておくことは連絡体制です。雨が降った時に参加者が混乱するのは「今日、ワークショップがあるのか、ないのか」ということです。運営者側は連絡体制を整えて、その日の判断についての責任者を明確にしておかなければいけません。複数回行うワークショップでは、雨天連絡等について、前の回に確認しておいた方が参加者が混乱しません。一般公募のまち歩きのように不特定多数の参加の可能性がある場合は、前日や当日の連絡先を用意して、参加者に問い合わせもらう方式を取れば混乱を減らせます。

次に考えておくことは当日の対策です。雨の中でまち歩き等をする場合は、手荷物は少ない方がいいでしょう。また、濡れると文字が書きにくくなるので、シールを使ったり、スタッフが聞き取りをするなど、臨機応変に対応します。現地集合する場合は、屋根のある場所を受付にしておけばいいでしょう。

どうしても外で開催出来ない時には雨の日プログラムを用意しますが、これは本来のプログラムの目的にあわせて考えます。まち歩きは「気づき、発見を促すこと」が目的ですから、専門家の解説付きクイズ大会やイメージマップづくり(P.14参照)をする案があります。参考事例見学では「具体例を実際に活かせること」が目的なので、VTR等による具体例の説明といった代替案があります。他にも、雨対応のプログラムを考えることが出来ますが、凝った雨の日のプログラムを考えるよりは元のプログラムをうまく活用し、雨用に準備した資料などを次回のプログラムに使えばいいでしょう。

いずれにしても当日晴れるに越したことはないですね。